

無題 (夏目漱石)

真蹤 寂寞 杳として 尋ね 難く

虚懐を 抱いて 古今に 歩まんと 欲す

碧水 碧山 何ぞ 我 有らん

蓋天 蓋地 是れ 無心

依稀たる 暮色 月 草を 離れ

錯落たる 秋声 風 林に 在り

眼耳 双つながら 忘れ 身も 亦 失う

空中 独り 唱う 白雲の 吟

真蹤寂寞杳難尋 欲抱虚懐步古今
碧水碧山何有我 蓋天盖地是无心
依稀暮色月離草 錯落秋聲風在林
眼耳雙忘身亦失 空中濁唱白雲吟

解説 漱石晩年の連作七言律詩最後の第六十四首で、大正五年十一月二十日の作。

語釈 ※真蹤 真実の道。絶対の真理。 ※寂寞 静かなさま。さびしいさま。

※杳 是るかなさま。ぼんやりとして暗いさま。 ※虚懐 私利私欲のない心。

※蓋天蓋地 天地ということ。天地をおおうすべてのもの。 ※依稀 ほのかなさま。

※錯落 入りまじるさま。 ※白雲吟 漱石自身の広大な天地の中での没我の心境を、このことばで表記したものとみる。

通釈 真実の道はひっそりとして微か^{かす}で、手の届かない遠い彼方にある。せめて、私は、我欲利己心のない、恬淡^{てんたん}とした心で人生を歩み、生涯を終えたいと考えている。碧く澄んだ河の水、青々とした山の緑を見るがいい、どこに執着するものがあるうか。広い天地を見るがいい、全てみな無心である。ほのかに夕やみのとぎす草むらの向こうに、明るい月が上り、雑木林を吹く風が、侘しく入りまじる秋の音を響かせる。私は今、この風物を目にし、耳にしながら、感覚を失ったようにふと我を忘れ、独り空中に浮かんで、白雲の歌をうたっているような気分を味わっている。